

新年宴會

御講書始

七草粥

五日 新年宴會 宮中では、皇族、大臣、各國公使等に酒饌を賜はる。民間では五ヶ日といつて、雑煮餅を喰ひ、酒宴を開く。

七日 御講書始め 宮中では、天皇、御學問所に臨御、侍講たちの進講を聞き召さる。

民間では、七種の菜を入れたる粥を喰ふ。これが、五節句の始めてある。その七草とは、

せり、なづな、ごぎやう、はこべら、佛の座

すずな、すじしろ、これぞ七くさ

といへる歌の通りである。これを前夜に摘んで置いて、今朝、俎板にのせて、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ前にと、聲高に歌ひはやしつゝ、たゞいて、之を粥に入れて喰ふのである。(羹にするともある)これは、延喜十一年正月七日から始まつたことで、これを喰へば

人日

萬病無しといふ意である。

この日を人日といふのは、東方朔の古歳事書といふものに、元日を鶏といひ、二日を狗といひ、三日を猪といひ、四日を羊といひ、五日を牛といひ、六日を馬といひ、七日を人といひ、八日を穀といふとあるから起つたので、天地の初めて開ける次第をいつたものらしいのである。

陸軍始

八日 陸軍始め、觀兵式あり。

十日夷子

十日 十日夷子といつて、この日、夷子神社に參詣して福を祈る者が多い。

鎧開

十一日 この日は、武家にては、鎧具足に供へた鏡餅をちろして食する。これを鎧開きと稱へる。昔は二十日であつたが、刀柄を祝ふ義、大猷院の薨去の後、この日が忌日に當るので、十一日に改め

たのである。民間では、この日を帳祝ひといつて、新年の帳簿を綴
ぢて、神に供へて祝ふ。

十四日 年越しといつて、門松や、しめ縄を取り去る。そこで、今日
までを、松の内とも、しめの内ともいふのである。

地方によりては、今夜、藁で、馬や、錢つなぎを作つて、人の家に置いて
餅や金銭と交換する風がある。その時、家の者が水をうちかける。
これは、古く、だいでこんで、白や、杵や、判金などの形を作つて、をしき
つらねて、籠笠をきて、人の家へ持ち行きて、戸の内へさし入れて置
くと、主人が、それを取つて、をしきに、米や餅などを入れて、もとの所
に置く。それを持つて歸る時、家のものが、待ちうけて、水をうちか
けて、笑ふ風があつたのが、變じたものであらむ。地方では、之をと
びくといふ所があり、四國では、かいづりといひ、中國邊では、とろ

へいといふ所がある。今はこの風が、大方亡んだやうである。

爆竹

左儀長

十五日 門松、しめ縄を焼き拂ふ。書き初めをも焼いて、その高く
あがるのを喜ぶ。これは、支那の爆竹、左儀長などの風が傳はつた
ものである。(爆竹とは、竹をやきて、音をさせる事、左儀長とは、もと
印度で、十五日に、僧徒が集まつて、燈をともし、佛舍利を見ることが
あるが、それらから來たものではあるまいか。左儀長といふ意味
は、昔、支那で佛法が始めて渡つた時に、道士が、之をやぶらんと訴へ
た時、何れが、しるしがあるかを見んとて、佛經を左に、道士の書きも
のを右に置いて、火をかけたるに、右の方が焼けたので、左の義が長
じて居るといふのから起つたといつて居る。(爆竹は、支那では、元
日に庭前ですると、惡事を除くといふ風習になつて居る。)

この日、小豆粥を食すると、邪氣をはらふといふことになつて居る。

餅の粥

又、餅の粥といつて、平安朝時代には、粥杖で男女の腰をうつたことがある。農家では、この粥を稻の藁の穂先につけて、粃を、それにまぶして、色々な稻種の種類の豊凶を豫占する。また、菓物の木を鎌などでうつて、粥を供へて、多く實を結ぶことを祈る。これは古くから傳はつて居る風習である。此日は、一般に業を休む。この日を上元といふのは、道家の説である。

やぶいり

十六日 この日、主君を持つた奴婢は、宿居ヤブイリといつて、一日の暇を乞ふて家に歸つて、遊樂する。近頃は、やどいりをなまつて、やぶいりといつて居る。

歌御會始

十八日 歌御會始め。(年によつて違ふことがある。)

鏡開

二十日 二十日正月といつて祝ふ。此日、鏡臺に供へた餅をちろして食する。之を鏡開きといふ。「はつがほを祝ふ意味であるが、

孝明天皇祭

これは後には四日になつたやうである。
三十日 孝明天皇祭

この月は、年の始めてあるから、萬事に、吉を求めて、凶を避けることをつとめる。特に、正月と五月と九月とは一年の中でも大事な月として居る。又、朔日と十五日とは、日の中で大事な日としてある。この正月の初めの寅の日には、京都邊では、鞍馬の毘沙門天に參詣して福を祈るので、神社の前では、福搔フカカキといふものを賣つて居る。

二月

十一日 紀元節 神武天皇御即位の日。

十五日 涅槃會 釋迦入滅の日

この月は、初午、中チの午、乙チの午の日には、稻荷の社に參詣する者が多

紀元節
涅槃會

上巳

三 月

三日 上巳ウツヒとも重三オモサミともいふ。上は初めの意にて、初めの巳の日といふ意。これは昔は初の巳の日を祝つたからである。この日が桃の節句にて、艾餅アヒキを食し、白酒を飲みて祝ふ。江戸時代の初めから、雛祭をこの日に定めて、女の子のある家では、雛人形を飾りて祭る。この桃は、邪氣を拂ふものとせられて居るに、この月は桃の花の咲き初める頃であるから、特に之を酒にもひたして病を除くとして居る。昔は、この日に曲水の宴が行はれた。これは、川のほとりに遊んで、不浄をみそぎはらうて、流れる水に盃を浮かべ、その盃が自分の前を過ぎない内に、詩を作つて、その盃を取つて酒をうけて飲んだのである。これは支那の風が傳はつたもので、我國では、顯宗天皇の御時から始まつたらしい。

曲水の宴

春季皇靈祭

二十一日 春季皇靈祭 (彼岸の中日)

四 月

神武天皇祭

三日 神武天皇祭 天皇崩御の日

灌佛

八日 釋迦の生誕の日で、灌佛カンブツともいふ。佛寺では、釋尊の像にあま茶を灌ぐ。

五 月

端午の節句

五日 端午の節句とも、重五ともいふ。この日、菖蒲や艾を以て家の軒をよぎ、粽チマキを喰ひ、菖蒲酒を飲む。粽を喰ふことは、支那の屈原といふ者が汨羅ベキヲの水の中に投じて死んだ時、楚の國の人が、之を憐んで、この日になると、毎年竹筒の中に、米を入れて、水に投げ入れて、之を祭つたが、後に、屈原の魂があらはれて、あふちの葉に、食物を包んで、その上を五色の色糸で結んで投げ入れてくれ、しかすれば、他

のものに奪はれないといつたので、遂にさうすることになつたので、粽を喰ふのは、その意からである。また一説には、屈原の姉がさやうにして祭つたのであるとか、或ひは、粽は悪鬼にかたどつたものであるから、之をねぢ切つて喰へば、鬼を降伏させることになるのであるといふやうな説もある。

菖蒲は、邪氣をはらひ命を延ばすものとして用ひるのである。

昔は、薬玉クシタマといつて、菖蒲、艾など十種ばかりを、五色の糸で結んで、壁にかけたり、また、宮中では御帳ミナボコにかけられた事がある。邪氣をはらふためである。

この日を、男の子の節句と稱へて、甲冑をつけたる人形を飾り、子供は菖蒲の株で、互にうち合つて勝負をするのは、いはれのある事だ。昔、光仁天皇の御代に、外國の冠が攻め寄せたれば、早良親王ハヤシチノミコを大將

軍として、これを禦がしめ給ふた。その御出陣の日が、五月五日であつて、この時、俄に大風が起つて、外冠は一戦に及ばずして、亡んでしまつたといふのから起つたのである。今でも、家々に、鎧を飾り、男兒のある家には、鯉幟を立て、その子の立身を祝ふ。昔は印地インヂ打ウチといつて、この日、男兒が組をわけて戦争のまねをしたことがある。

この日は、湯にも菖蒲、艾を入れ、女の髪をも、菖蒲で結ぶのは、邪氣をはらふためである。

靖國神社
例祭

六日 靖國神社例祭

六月

大祓

三十日 大祓 天武天皇の御時より始まる。名越ナゴシ稗ハヒともいつて水邊に出て、みそぎはらひして、茅輪を作つて人々に、その中をくぐ

らせる、これは邪神をはらひなだめるためである。「なごし」といふのは、和しの意で、やはらげる事である。又、麻の葉で人形を作つて、身體をなで、歌をとなへて、川に流すのを、撫物ナグモノといふ。現今、東京では、紙で人形をつくつて、神官が氏子の者に配布し、それに年齢を書かせたものを用ひる。これは夕方から夜に行ふのである。

七 月

七夕

七日 七夕といふ。牽牛、織女の二星を祭るのである。これも、もとは支那から渡つたもので、牽牛、織女の二星が一年にたゞ一度、七月七日の夕、天の川の兩岸に立て會見する。その時、烏鵲カササギが、翼をのべて橋にして、織女星を渡す。もし、この夕、雨が降れば、水が漲つて渡ることが出来ぬといふのである。この星祭のことを、乞巧奠キコウマシともいつて、宮中でも、一つの公事になつて居たのである。女兒は、こ

の星を祭つて、裁縫などの上達を祈る意味にもなつて居る。それは織女といふ文字から出たのである。これを祭るには、五色の紙を、短冊や色紙形にきつて、それに、色々の歌などを書いて、竹の枝に結びつけて、庭に立て、別に、五色の絲をかけることもある。庭先に棚をつくり、又は机を据ゑて、それに、その時頃の野菜の、茄子や、胡瓜などを、供へて祭る。此朝未明に、芋の葉の露をうけて、硯を洗ふ地方があり、又、稻葉の露を以て墨を磨つて、文字や詩歌を書くところもある。又、地方によつては、六日の夜から祭るところもある。我國では、天平勝寶七年に始まつたといふことである。此日、索麩を喰ふのは、昔、支那で高辛氏の少女が、この日に死んで、その靈が鬼神になつて、人に瘡オウをやませるので、その少女が、生きて居た時に好んで居た索麩を以て、これを祭ることになつたといふ傳

孟蘭盆會

説から來たのである。

十三、四、五日 孟蘭盆會 孟蘭盆とは、懸倒救器といふ意味の梵語

で、即ち、餓鬼を救ふ意である。俗間には、略して、精靈祭とも、盆ともいふ。十三日の夜より、佛前墓所に、火を燈し、先祖の靈を祭る。その起原は、齊明天皇の御代に始まり、聖武天皇の御代に至りて、民間に、普く行はせられるやうになつたといふことである。木蓮尊者の母が死して、餓鬼道に落ちたのを救ふために起つたものである。などいふ説があるが、例の附會説である。

中元

十五日は、中元といふ。正月十五日を上元とし、七月十五日を中元、十月十五日を下元といふのから起つたのである。この日は、元來、支那では、人間の罪を贖ふ日として、古くから、行はれて居たのであるが、我國では何時頃よりか、孟蘭盆と同じものゝやうになつて、こ

八朔

十五夜

八 月

の十五日より少し以前から、親戚知己の間に、互に物品を贈答する風習になつて來たのである。これは、一年中の、後の半年の始めて、前の半年の終りである處より、このやうなことが行はるゝことになつたのであらふ。十五日は、業を休み、十六日は、婢僕の藪入りをすることは、正月の時と同じである。

一日 この日は、八朔といつて農家では、其の年の新穀を收めて、田の實と稱へて祝ふ。これから、後には、人に物を贈答する風が行はれるやうになつたといふことである。

十五日 此夜は月見の宴を設ける。秋の九十日の中の月の十五夜であるから、仲秋といへば、この月の十五夜のことになつて、仲秋月を賞すなど、詩や歌の題に用ひる。支那では唐の季頃から、此夜

の月を賞することが盛んに行はれ、我國では、貞觀年中からであるといふことである。月見團子といつて、その數を十五つくつて、膳に据ゑ、枝豆や、栗や、串柿などを月前に供へる。この團子を製して供へることは、支那で、月餅と名づけて、色々の形につくりて、人々これを食し、又、相贈ることがあるより來たものであらう。俗にこの夜の月を芋名月イモイグツと呼ぶ。

九 月

重陽

九日 重陽とも、重九ともいふ。五節句の一つで、菊の節句といふ。菊花酒を飲む。これは昔、支那で菊童子といふ仙人が、深山に在つて、菊の葉の露を嘗めて齡を延ばしたといふ傳説から來たものらしいが、この頃は、菊の花の盛りであるから、菊花を酒にさして飲むやうになつたのであらう。宮中では、菊花の宴がある、之を重陽の

宴と名づけられたが、今は、觀菊の會を行はれる。

此日、高き山に登り、又、茱萸ヅウを臂にかけるといふのは、支那で、費張房ヒチヨウボウといふものが、その弟子の桓景クワンケイに、ことし、九月九日には、汝の家に災があるから、絳囊アカキナゴを縫つて、それに茱萸を入れ、臂にかけて山に登つて、菊酒を飲めば、その災が消滅すると教へたので、桓景は、その言の如くにしたが、家に歸りて見れば、家中の鶏、犬などが悉く死んで居たといふ傳説から來たのである。

十三夜

秋季皇靈祭

十 月

十三日 この夜、後の月、又、栗名月と名づけて月見をする。
二十三日(又は、廿四日) 秋季皇靈祭 (彼岸の中日)

神嘗祭

十七日 神嘗祭 新穀(これにて、つくりたる御酒、神饌をも)を、伊勢の大廟にすゝめられる。宮中にて、陛下の御遙拜があり、且つ、勅

使を神宮に遣はさる。

二十日 惠比須講といつて、商家で、知己や親戚を招いて、惠比須、大黒神を祭り、商賣の繁榮を祈るために、宴を張る。

酉の市

附記 この月の酉の日には、酉の市といつて、大鷲神社に參詣す

亥子祭

る。そこには熊手などを賣つて居る。又この月の初めの亥の日を、亥子祭といつて、餅をつくつて喰ふ。その餅には、大豆、小豆、大角豆、胡麻、栗、柿糖の七種を入れる、これを亥子餅といふ。これは、正月を寅として、十月は、十二支の終りて、亥の月にあたるから、亥の日を、かく祝ふのであらう。而して猪は一年の月の數ほど子を産むもので、これらの縁起からも、祝ふのであらう。

亥子祭には、小兒が多く集まつて、石に繩をつけて、家々の庭などで、それを以て地を搗いて、亥子のかねを祝はぬものは、鬼を生め、

蛇を生めなど嘯す。家の者よりは、餅などを贈つてこれを祝ふ地方がある。

下元

十五日 下元といふ。前に掲げた三元の一つである。

十一月

天長節

三日 天長節 今上陛下の御誕生の當日を祝し奉る。

新嘗祭

二十三日 新嘗祭 新穀を諸神に供へ、且つ、天皇陛下も親しく聞き食し、群臣にも賜はるのである。

十二月

八日 針供養とて、針を祭つて、針仕事を休む。

三十一日 大祓、六月と同じである。

除夜

大晦日 除夜ともいつて、一家揃うて、酒宴を開いて一年中の無事に過ぎしを祝し、新年を迎へる用意をする。此夜は、古くは、初夢を

追儼

煤拂

見るために、寶船を床の下にしいて寝ね、又獺の圖をまがいたものを枕の下に入れて寝たことがある。寶船は、元來、凶夢を見た時に、夢をのせて流すためにしたものであるが、後には、寶といふより、よき夢をみるためにしたらしい。獺は凶夢を喰ふ獸としたのである。追儼といつて、煎豆を室内に撒いて、福は内鬼は外といつて、噓すことは、もと節分の夜にするのであるが、後には、除夜にもするやうになつた。門に鯛の頭をさすのは、悪鬼を避けるため、柁をさすのも、略同じ意味である。鯛をさすのは支那から來たらしい。煤拂とて、家の内を掃除する。これには、陰陽雜俎にも、し、器物が百年を経れば、付喪神といふものになつて害をするといふ傳説もあつて、必ず行ふことになつてゐるが、つまり、一年中の塵芥を拂ひ清めるためである。

曆日に關する迷信

曆の基礎や組織が了解せられた上は、これらの日時や干支などが人間の本性や吉凶と關係を有して居るものでないといふことは明らかになるであらう。然るに、東洋では、支那が本家で、我國にも非常なる影響を受けて、曆日や家相方位や、人間一生の吉凶などいふことに關する迷信が、随分多く行はれて居る、その一斑は、已に説明したところによつて、根據の無いものであるといふことが知られたであらうが、なほ、これらの外にもあるから、これを序でに記して置かう。特に西洋でも、曆日に關する迷信が行はれて居るから、これも併せて説明しよう。

一結婚に關するものでは、女が丙午の生れ性のものは、夫を殺すといつて、大いに嫌ふ。これは、干支から來た迷信である。その外に、

結婚

年

月

生れ性の凶性の者は吉て相尅の者は凶とする。

一 寅の年の結婚を嫌ふ。虎は千里往つて千里歸るといふからである。申年を嫌ふのは「申は去る」と通ずるからである。その反對に、酉年には、鶏のやうに多く子が出來るといつて結婚が多く、戌年には、犬の如く産が軽いといふので、結婚が多い。

一 月では、五月は、病月ヤメヰ閏月の意で、五月雨から來た異名といふので嫌ふ。七月は佛事の月として嫌ひ、十月は神名月であるから嫌ふ。又正月、五月、九月を嫌ふといふ説もある。春は一説には、花の如く散るといふので結婚をきらふといふが、一説には花は實を結ぶもとであるから、却つて吉であるとするのもある。

一 日では、六曜の中の、佛滅、赤口の兩つを嫌ひ、十二直の中では、「とる」と「やぶる」との兩日をきらふ。

西洋の結婚と月

一 西洋では、誕生日に結婚するのを嫌ふ。又、五月の結婚を忌む。花嫁が結婚する月に就いて、次のやうな俚諺がある。

一月の花嫁は、家持よく、従順なり。

二月の花嫁は、親切にして愛情あり。

三月の花嫁は、輕薄にして饒舌、而も直きに腹を立てる癖あり。

四月の花嫁は、尻落附かず、餘り伶俐ならず、併し容貌は美なり。

五月の花嫁は、奇麗にして愛嬌あり、且つ氣前が面白し。

六月の花嫁は、強情なれど、鷹揚の處あり。

七月の花嫁は、奇麗にして敏捷なれど、少しく短氣なり。

八月の花嫁は、情深く實際的なり。

九月の花嫁は、美人にして愛情あり、人に好かるべし。

十月の花嫁は、美しくして世辭に巧なれども、嫉妬心ありと知る。

べし。

十一月の花嫁は氣が大きくて親切なるが、性質は粗暴なり。
十二月の花嫁は奇を好み交際上手なり。

葬儀
一 葬儀には、五墓日と酉の日と、友引とを忌む。これは、五墓日は、五つ墓をつくるやうになるといふので嫌ひ、酉の日は、更に多くの人をとるといふので嫌ひ、友引も、友をさそひとることを忌むのである。

旅行
一 旅行をするには、往くに七日、歸るに九日を忌む。又、地方によりては、往くに十七日、歸るに廿五日を忌む。

月
一 四日の月を始めて見るのを忌む。西洋では、窓から新月を見、又、左の肩に見るのは凶で、戸外で、又、右の肩に見るのは吉として居る。

一 曆を、夜間に見ることを忌む風がある。榮華物語に、夜、曆を見たので、いのりをさせて、さわいだといふことが書いてある。

一 猫が逃げた時には、曆のその日の上を墨でぬつて置くと、歸つて來るといふ禁厭イナヒがある。

一 西洋では、毎月十三日を忌む。これは、古い傳説から來たもので、それに、キリストが十二人の使徒とこの世で最後の晚餐を催したのが加はつたのである。

一 西洋では、一週の内では、特に金曜日を忌む。もし、十三日が金曜であれば、大凶の日として居る。金曜日に、爪をつめば、災難にかかり、土曜日に、移轉すれば、落ちつかず。日曜日に、臥床を裏返すことを忌む。

一 西洋では、更に、五月に、ブラシハシ等などを買ふと、家内に病人が絶

えないとして居る。

一 日本では、夕方や夜、爪をつむのを忌む。

一 旅行して三月越しになるのを忌む。

一 正月の日の中で、五日までの内に、自分の生れた十二支の日があれば、その年は幸福であるとしてある。且つ、正月の自分の生れた支の日は、徳日といつて、人から物を貰ふは吉、人に物を與ふることを凶とする。

徳日

年の豊凶

一 正月の始めの丑と午との日の順によつて、その年の豊凶を占ふことがある。たとへば、元日が丑ならば、指で、一つ二つと數へる時に、拇指を一つ屈めるのであるから、稻を一把負うて臥して居るから、その稻は重くて豊年のしるし、もし、元日が申の日であれば、六日が丑で一本の小指が伸ぶ順であるから、一把負うても起きて居

三三

雑煮と太箸

福の神

るから、凶年であるといふやうに判ずるのである。

一 正月に有つた吉事凶事は、五月にも、九月にもあるとして居る。

一 正月の三元日の雑煮餅を喰ふ時に、箸が折れると、凶變がある兆として居る。それで、必ず太箸を用ゐる。これは次のやうなことから起つたのである。

足利七代將軍義勝、嘉吉元年の元日に雑煮餅を召す時、箸折れしに、その年の七月落馬して薨じけり。これより、太箸を用ふるに至れりと云ひ傳ふ。

要するに、人間が吉凶禍福に、心をとゞめる事の甚しいことは、實に想像の外である。次に、元日の福の神のことについて、面白い話があるから、これを抄録して示さう。

けしからず物ごとに祝ふ者ありて、與三郎といふ中間に、大晦日

の晩言ひ教へけるは、今夜はつねよりとく宿にかへり休み、明日は早く起き來り門をたゞけ。内より誰ぞやと問ふ時、福の神にて候と答へよ。則ち戸を開けて呼入れんと懇ろにいひふくめて後、亭主は心にかけて、鶏の鳴くと同やうに起きて、門に待ち居けり。案の如く戸をたゞく。誰ぞと問ふ。いや與三郎と答ふが無興、やう／＼ながら門をあけて入り、そこもと火をともし、若水を汲み、羹を据うれども、亭主顔のさま悪しくて、更に物いはず。中間不審に思ひ、つく／＼思案し居て、よひに教へし福の神をうち忘れ、やう／＼酒をのむ頃に思ひ出し、仰天し、膳をあけ、座敷をたちさまに、さらば福の神と御座ある、お暇申し參らするといふた。

これは醒睡笑といふ書の中にある話であるが、そのさまが今も眼

前に見えるやうである。この風は、今はすたれて、田舎にては、乞食やうのものが、福の神が舞ひこんだなどといつて、面をかぶつて、米俵に、錢をつけて投げ込み、物をもらふやうに變はつた。併し、地方によつては、なほ二日の未明に、主人が、雨戸を少しあけて、櫛に米を入れて膳に載せて供へ置き、少し経て、その中を見ずして、高き神棚に供へ、燈明をともして福を祈る風がある。これは、毘沙門天から福を受けるといふのである。而して、正月と十二月とは、年の始めと終りであるから、實に、迷信でかためたやうであるのも、必竟、人間の自己保存から出るので、無理もないことである。

甲子の日に、燈心を買へば、その家富み榮ゆといふは、大黒天へ福を祈るより出でしことなるべし。

丙午、丁未の歳は、世俗古より災厄の年として恐る。又、甲子と、庚辛とは病人に當り、病重しといふ。

四季ともに、甲子の日の雨は、長雨のしるしとせり。

節分の夜、大歳の夜、正月六、十四日の夜、酉の時に、井水を汲みて清き磁器に盛り、一滴もあふれぬやうに、竈神に供へて、翌朝卯の時に、もとの井にかへせば、失火の虞なし。

結

論

歴代即位祥瑞災變ある時は年號を改めらる。又辛酉と甲子の年には革命とて、必ず改元あり。これ漢士緯書の説より起れるなり。

太陰曆廢止

中陽曆

以上曆の沿革より、その基礎組織及びこれに附従するあらゆる事項を説明したつもりであるが、予は最後に、太陰曆記載の廢止と、曆の改正といふ事について一言して置かうと思ふ。

太陰曆の廢止は、只明らかに、舊の月の大小、閏月などを記することを廢止したまで、その他に就ては、從來のまゝであるから、民間の農作や商業上などには、更に著しい影響は無い筈である。故に、予輩はこの改正に就ては、實に適當なことであると思ふ。たゞ、干支が、古來の曆史上に關係があるので、從來の如く記載してあるために、月や日に關する迷信は、依然として行はれるのは、實に止むを得ざることである。

更に、近時、中陽曆と名づけて、太陽曆以外、別に、日本曆ともいふべきものを用ひられんことを、衆議院に建議した者がある。その説く

所は、一年を平均して、一ヶ月を三十日とし、春分、秋分及び夏至、冬至と、一年の日數を兩つに分けた中間の一日とを中日として、五日の閏日を置き、之を曆日の外とし、一ヶ年を十二月に分けて、三百六十日とするなど、從來の太陽曆を折中したやうなもので、而も氣節と年の始めとを合はせるやうにしたものであるが、今の太陽曆の一月一日が、氣節の春分に合はず、その定め方も、全然適當なものとは云へないが、しかし、前にも屢説明した如く、地軸の傾斜や、運行なども、年々少しづつは變化するものもあり、且つ、今の太陽曆は、殆んど世界共通の性質のものになつて居るから、その月の大小の定め方など、或ひは氣節が、年の始めと多少合はない處があるにしても、之を變更するといふ事は容易なことではない。故に、日本だけで、用ひる曆を作つて日本の氣節に合せやうとする考は、その目的と

する處が小さくて、何事も世界的になる傾向のある時代には、如何はしい思ひ付きてはあるまいか。要するに、太陽曆の缺點は、西洋の學者も之を認めて居るところで、中には、之が改正を主張する者もあるが、之を實行するといふことは、學理上の問題以外の勢力問題、感情問題であることを考へねばならぬ。

曆には、具註曆、七曜曆などあり。具註曆には、漢文にて記したると、假字にて書きたるとあり。後世、民間にて私曆を造りて通用せるものあり。伊勢曆、三島曆、會津曆などにて、何れも卷本なり。また、官曆といへるあり、これ、假名曆の一種なり（卷首挿入口繪参照）。明治以後は、本曆と略曆とを造り、神宮司應にて頒つこととせり。

曆 終

明治四十二年十二月十日印刷
 明治四十二年十二月十日發行

曆 奥 附
 正價金卅五錢

著 者 東

宗 平

東京市日本橋區本石町十軒店八番地

發 行 者 吉 野 久



東京市日本橋區本石町十軒店八番地

印 刷 者 岩 村 俊 二

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目三番地

印 刷 所 株式會社 秀 英 舍 工 場

發 行 所

東京日本橋十軒店
 振替口座一〇七番

裳 華 房



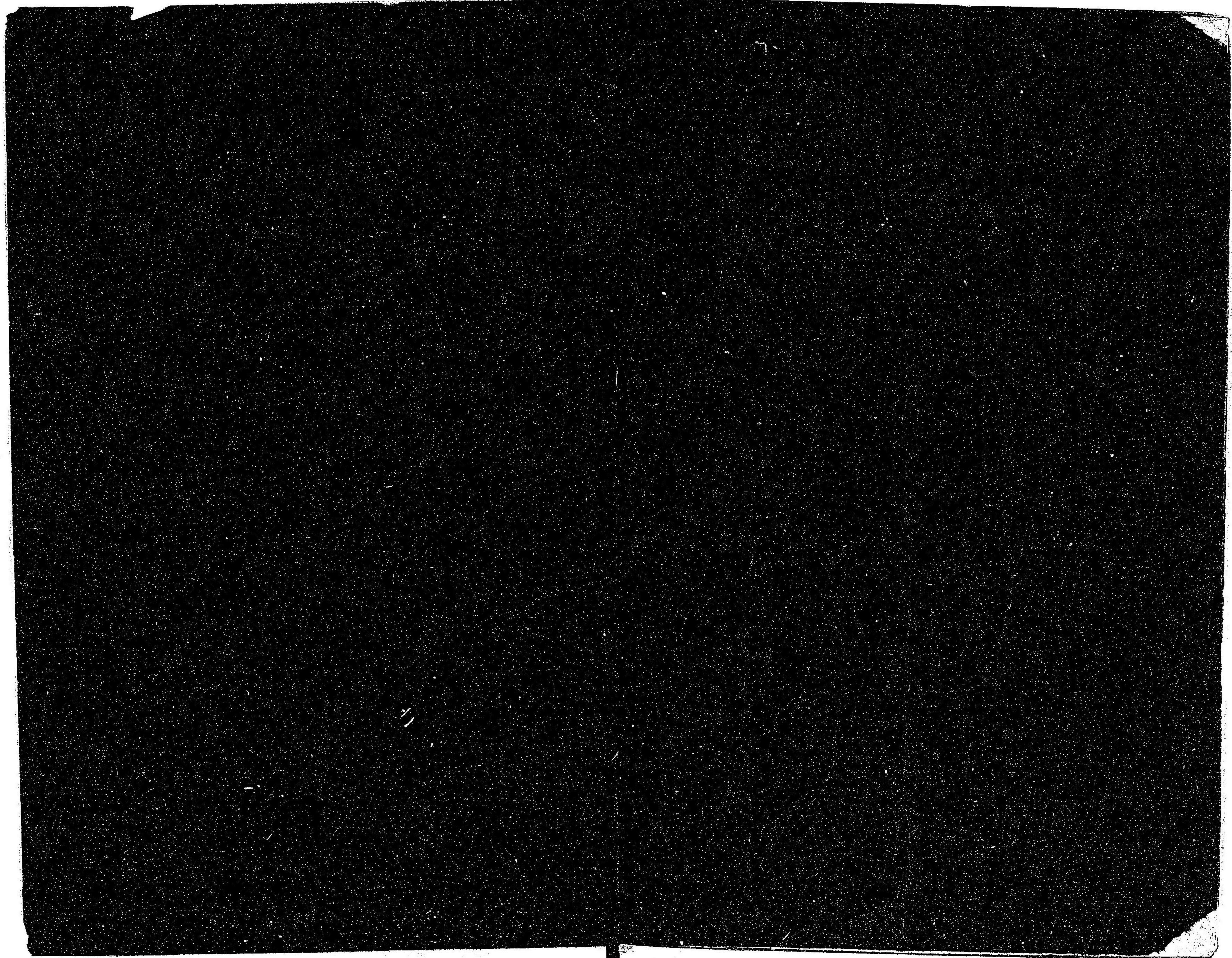
文學博士 男爵 加藤弘之先生序
法學博士 人性主幹 石橋臥波先生著

東京日本橋
裳華房

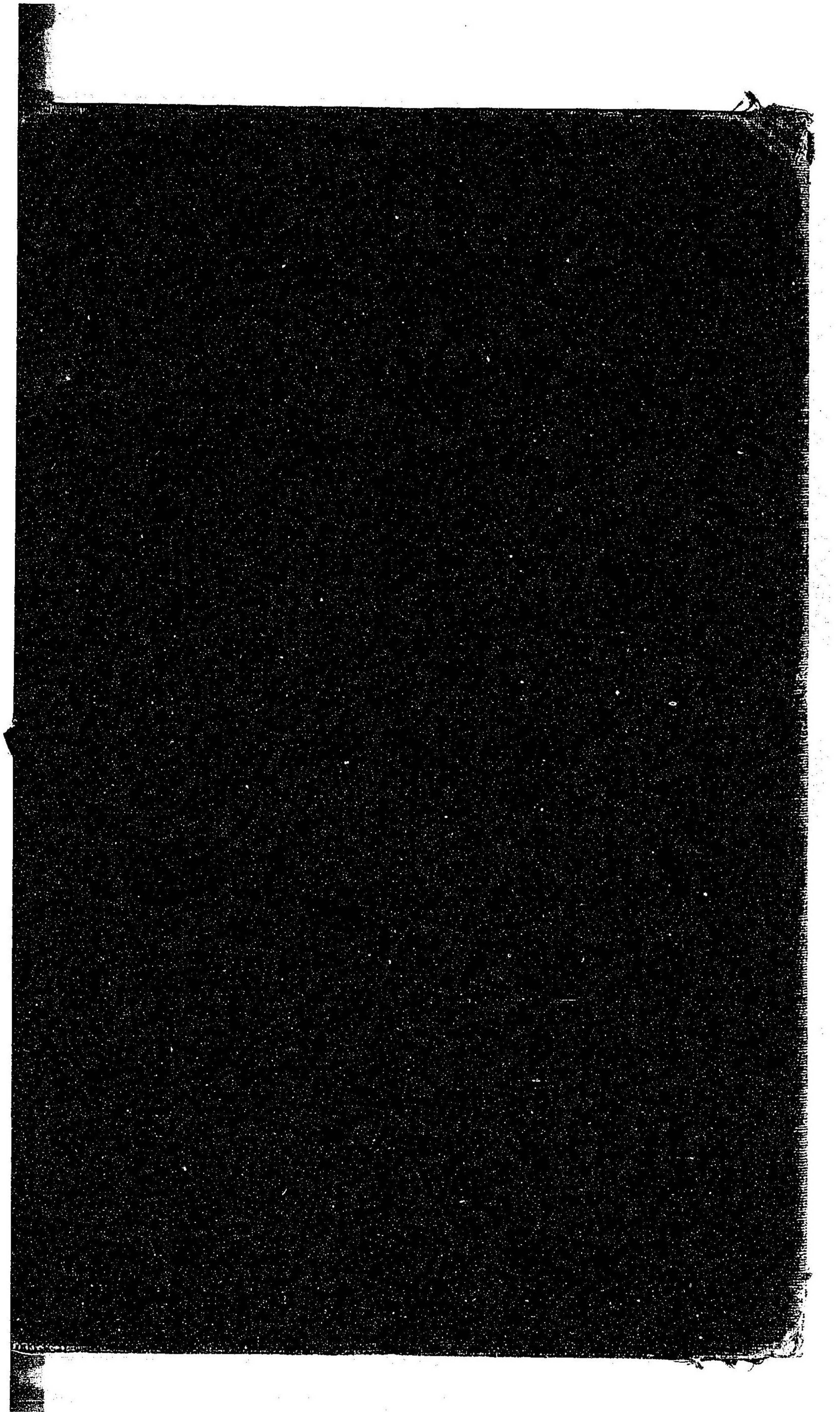
素人宗教觀

菊判美本全書冊
正價金五拾錢
小包普通金八錢

素人宗教とは何？。佛教に非らず、基督教に非らず、又瓢箪にて鯰を壓ふるが如き空漠なる哲學論に非らず、從來宗教家の所謂宗教とは全然反對の見地に立ち、先づ人間の運命宇宙の神怪より説起し宗教と信仰の本質を明かにし、宗教界の四大謎を掲げて、之を解決するに最新科學の快刀を以て亂麻を斷つ概あり。最後に著者の信仰を告白して素人宗教觀の本質を明かにし、附するに靈魂問題を以てす。眞に世渡りの羅針盤にして宗教界の一大警鐘なり。
加藤博士曰く。之を通讀するに吾意を得て頗る愉快に感じ、多大の賛同を表すと。信仰問題に留意するの士、それ最後の安心を本書に求めよ。



72
382



72

382

056246-000-6

72-382

曆

東 宗平/著

M42

CAK-0148



